

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

寺 平 遺 跡

1980

長野県上伊那郡飯島町



序



飯島町においては、昭和48年から県営ほ場整備事業が実施され、今年度は七久保地区第18工区が実施されています。このため、工事に先立ち、飯島町教育委員会では西岸寺の旧参道の確認調査を行ないましたが、調査の結果、当地域は全国的にも珍しい中世の梵鐘鋳造跡であることが確認されました。

幸いにも、国・県の補助事業として本調査が行なわれ、文化庁、長野県教育委員会、坪井良平氏をはじめ多くの方々のご指導ご協力をいただき、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝にたえません。

出土品については、飯島町陣嶺館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から感謝申し上げる次第であります。

昭和55年3月20日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二



P1 寺平遺跡全景

目 次

序

挿図目次・図版目次

第 I 章 遺跡の概要と調査経過	(1)
遺跡の立地	(1)
歴史的環境と調査経過	(1)
第 II 章 梵鐘鋳造跡	(2)
第 1 号遺構	(2)
第 2 号遺構	(2)
第 3 号遺構	(2)
こしき炉台	(2)
第 III 章 遺 物	(4)
第 IV 章 まとめ	(1)

挿 図 目 次

第 1 図 位置図 (1 : 100,000)	第 2 図 梵鐘鋳造遺構実測図
第 3 図 第 1 号遺構梵鐘鋳型底部実測図	第 4 図 第 3 号遺構鋳型底部実測図
第 5 図 竜頭鋳型実測図 (1 : 2)	第 6 図 竜頭・撞座鋳型実測図 (1 : 2)
第 7 図 乳鋳型実測図 (1 : 2)	第 8 図 乳鋳型実測図 (1 : 2)
第 9 図 鉄製品実測図 (1 : 2)	

図 版 目 次

P 1 寺平遺跡全景	P 2 航空写真
P 3 第 1 号遺構と梵鐘鋳型底部	P 4 第 2 号遺構
P 5 第 3 号遺構と梵鐘鋳型底部	P 6 こしき炉台
P 7 竜頭鋳型片	P 8 撞座鋳型
P 9 乳鋳型片	P 10 乳鋳型片
P 11 梵鐘鋳型	P 12 梵鐘鋳型、鉄滓
P 13 銅 渋	P 14 鉄製品

第Ⅰ章 遺跡の概要と調査経過

遺跡の立地

寺平遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字本郷1,707番地に所在する。

遺跡は、天竜川の河岸段丘上に位置し、北側の十王堂沢川、南側の子生沢川に区切られた東西約200m、南北約600mの段丘のほぼ中央にある。遺跡の西側には西岸寺、南東約500mには飯島城跡がある。

遺跡に至るには、国鉄飯田線伊那本郷駅で下車し、南へ約800mほど歩いたところである。

歴史的環境と調査経過

寺平遺跡に隣接する西岸寺は、伊那谷でも屈指の禅宗の古刹であり鎌倉・建長寺開山の大覚禪師によって弘長元年(1261年)に興されたと伝えられる。その後、寺は付近一帯を支配していた飯島氏の寄進協力を得て七堂伽藍も造営され栄えた。南北朝末期から室町時代にかけて、寺は最盛期をむかえ一大聖場となつた。また応安元年には、室町幕府より鎌倉諸山に列せられ官寺となつた。この様に盛大を誇った西岸寺も天正10年の織田軍の伊那侵入にあって寺は荒れ果てた。

ところで西岸寺と関係の深い飯島氏は、平安時代末に興った信濃源氏の末裔であり、寿永年間にこの本郷の地に居を構えたと伝えられる。城は西岸寺の南東500mの同じ段丘上の先端にあり、城の東の段丘下には、古い居館と思われる跡や古城、陣垣外等の城に関係のある地名が残つていて、集落や農耕地が広がつてゐた。

寺平遺跡、西岸寺、飯島城跡は、同じ段丘上に位置しており、昭和54年に県営は塙整備事業の施行区域となり、工事に先立ち現在の参道より南にあったと伝えられる旧参道の確認調査を行なつたが、その結果梵鐘鋳造の工房跡が発見され、今回の調査となつた。



第1図 位置図 (1 : 100,000)

第Ⅱ章 梵鐘鑄造跡

第2次調査の結果、参道南側の水田から、梵鐘を鋳造した遺構が発見された。

この遺構は、配置図に示されているように、第1、2、3号遺構と、こしき瓶炉台の4遺構である。今回調査した範囲は、第1号遺構を中心として東西12m、南北8mで、その面積は96m²である。調査の結果により、遺物の分布範囲は、さらに調査区域外にも広がるものと想定される。

本調査により発見された各遺構とその出土遺物は、次のとおりであった。

(1) 第1号遺構

本遺構は、旧参道の確認のため南北に設けられた試掘トレンチから発見された遺構で、そのプランは、東西2.5m、南北2.4m、深さ地表面より約1m、楕円形を呈す。梵鐘鋳造のための土壌の1つである。当時のピットの深さは、おそらく1.5mから2mほどであったと想像されるが、削り取られて残存部は浅くなっていた。

確認調査の時に検出された遺構をさらに掘り下げたところ、梵鐘鋳型底部が検出された。この鋳型底部は、外端の径約1m、外型の径約88cm、内径72cmで、底部の面は、東北の方向にやや傾斜していた。このことは、梵鐘を取り出す際の圧力によりものではないかと思われる。底部の面は所々に剥落が見受けられた。

(2) 第2号遺構

本遺構は、第1号遺構に接して発見された遺構で、第1号遺構同様梵鐘鋳造用土壤である。東西2.5m、南北2.6m、深さ地表下約1.2mを測る。プランは楕円形である。遺構の壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁面には特別な施設は検出されなかった。遺構の底面は、黒色土を固く踏み固めた状態である。この底面に東西の方向に並ぶ3本の溝が発見された。この3本の溝の中には、木炭片や焼土、また、ロームのブロックが混在していた。これらの溝は、梵鐘鋳型底部の下部を補強するための木材の跡ではなかろうか。このような事例は、大津市滋賀里町長尾の梵鐘を鋳造した遺跡調査（「月刊文化財」昭和53年5月号、同54年10月号掲載）に見られる。

本遺構からは、鋳型97個、多量の木炭片、灰、銅滓、銅渣や陶器が出土した。

(3) 第3号遺構

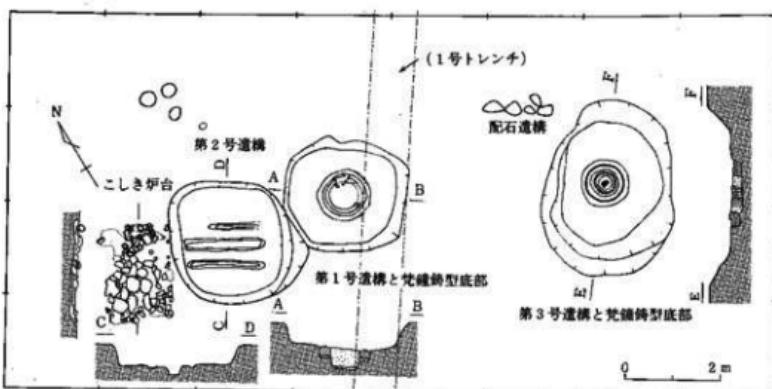
本遺構は第1号遺構の東5mの位置に発見された遺構で、これも、梵鐘鋳造用土壤の1つである。黒褐色土層を掘り込んでつくられており、遺構の覆土中より鋳型の破片や、粘土塊、乳の鋳型、木炭片、焼土等が多量に出土した。

これらの遺物を順次取り上げると、第1号遺構で発見されたと同様の、鋳型底部が発見された。この鋳型底部の外側の径は、90cmもある大型なものであった。梵鐘の外径は75cm、厚さは9cmを測る。この鋳型底部には外径の入る位置に8mmの段差が認められた。これは、おそらく鋳型が移動しないよう作られたものであろう。内型の入る位置には外型を入れたような施設は見られなかった。内型の内部からは、焼けた砂や、内型の破片、レンガ状ブロック等が混じって検出された。鋳型底部の厚さは平均して14~16cmを測り、その上面は、外型面の仕上げと同様、真土を幾重にも塗り、表面は「くろみ」と称されている木炭の細粉を羽汁でとかして塗って仕上げていた。この鋳型底部は、第1号遺

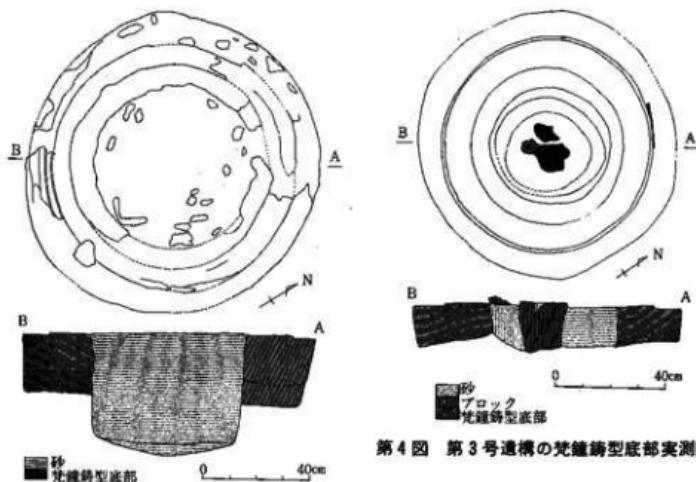
構のものより保存状態は良好である。また鋳型底部の上面には、銅片や、銅の細粉が青く残っているのが見受けられた。さらに鋳型底部の周囲には、外型が移動しないよう粘土の壁がめぐらされていた。

(4) こしき炉台

本遺構は、第2号遺構の西壁に接して発見された。その規模は東西1.4m、南北2mで、わずかに北へ傾斜している。遺構は粘性の強いロームの上に、人頭台の自然石と、鋳型の破片などを粘土で固めて作られていた。おそらく、こしき炉は、この遺構の上に据えられたものではないかと思われる。遺構内からは、梵鐘の鋳型片32個が出土した。



第2図 梵鐘鋳造遺構実測図



第4図 第3号遺構の梵鐘鋳型底部実測図



第3図 第1号遺構の梵鐘鋳型底部実測図

第Ⅲ章 遺物

本調査において出土した遺物は、梵鐘の竜頭はじめ、撞座や乳を含む鐘身の鋳型片、銅塊、銅渣、鉄滓、釘、古錢、陶品片等である。これらの遺物について、それぞれ簡単に紹介したい。

(1) 梵鐘鋳型

遺物としては梵鐘の鋳型が一番多く出土した。その数は遺構内外を合せて約600個に達した。

1号遺構発見の鋳型は、102個を数える。その中には梵鐘の竜頭鋳型破片3個と撞座鋳型が含まれている。

鋳型のうち代表的なものについてみてみると長さ27cm、幅12cm、厚さ7~8cmの鋳型は大型の部類で、鋳型外側1.5~2cmは赤褐色に焼けている、その表面の1部に外型を補強するための竹のたがを嵌めた痕跡がみられた。また、イネ科と思われる炭化物、植物のスサも含まれていた。鋳型の中間の部分は1.5~2cmほどで、色調は灰褐色でよく焼き締まっている。さらにその内側の部分は中間部分と同質であるが、その表面は長石及び鉄、銅などの融解物が固着し、赤褐色の光沢を呈している。さらにその内側には、真土を幾重にも重ねて塗り上げ、その上面に黒鉛の粉末を羽汁で溶かし仕上げを行っている。その他の鋳型は、内側の真土が剥落したものや小破片であるものが多かった。

2号遺構からは、1号遺構出土の鋳型と同様のものが、97個出土したが、梵鐘の径を推定するとのできるほどの鋳型は発見されなかった。したがって、本遺構の梵鐘については、今後の整理研究にまちたい。

3号遺構出土の鋳型は、総数97個である。遺物は鋳型底部の上面に投げ捨てられた状態で検出された。鋳型のほかには粘土塊、木炭、灰、焼けた砂等が多く出土した。

こしき炉台遺構から出土した鋳型は、全部で32個を数える。その大部分は小破片で、部位などを知ることはできない。

以上のように、梵鐘の鋳型は各遺構から出土しているが、これらの鋳型を梵鐘の部位によってまとめる、次のとおりである。

〔竜頭の鋳型〕

今回の調査で11個の梵鐘の竜頭鋳型片が出土した。1号遺構からは3個発見された。そのうち1個は、火焔部の上に宝珠のついた大型破片で、幅18cm、高さ9.7cm、厚さ5cmを測る。鋳造部は2.2cmの深さで作り込まれ、かなり硬く焼き締まっている。

そのほか2号遺構からも小破片であるが火焔と宝珠の鋳型が出土した。その他の竜頭はグリットより出土したものである。

〔撞座鋳型〕

1号遺構から出土した梵鐘の撞座鋳型は、直径9.3cm、厚さ2.5cmの11葉蓮華文である。坪井良平氏によれば、11葉の撞座は非常に稀であるとのことであった。

〔乳型〕

本調査で出土した遺物のうちでも特記すべきものの1つである。梵鐘の乳型の出土は各遺構のほか、グリットからも出土をみた。

1号遺構出土の乳型は10個で、この乳型の形態は笄形で頂部に突起の付された鉢型である。その最大の径は2.9～3.1cmを測る。

2号遺構出土の乳型は全部で28個を数えた。その形状は1号遺構出土の乳型と同様で、その径は3.0～3.7cmと1号出土のものよりやや大きめである。

3号遺構出土の乳型は、1、2号遺構より多くその数57個である。形状は1、2号遺構の乳型と同様である。径は3.0～3.1cmを測る。大きさにはあまり差がみられない。

こしき炉台出土の乳型は、全部で6個発見された。鉢型の形状や大きさは1、2、3号遺構と同様であるがそのうち1個は径が2.9cmとやや小ぶりである。

(2) 銅渣

銅渣は各遺構および遺構以外のグリットから発見された。その数は101片を数える。

(3) 鉄滓

鉄滓も銅渣と同様に、各遺構と遺構外のグリットから出土した。おそらく鋳造に関係するものではなかろうか。

(4) 鉄釘

大形のもの10本、小形のもの19本が出土した。大形のものは、1辺が5mm前後の角釘で、その長さは8～10cmを測る。小形のものは1辺が3mm前後の角釘で、長さは5～6cmである。このうち2本については1号と2号遺構内より出土しているので、鋳造になんらかの関係をもつものではないかと思われる。

(5) 木炭

木炭の分布は遺構内のはか調査区域の全体に及んでいる。その層位は地表下60～70cmで、この層位は各遺構が確認された層位と一致しているのが注目される。これら木炭の分布範囲は、調査区域外にも広がっていることが予想され、梵鐘鋳造には、意外に広い場所が必要であったことがうかがわれる。

(6) 古銭

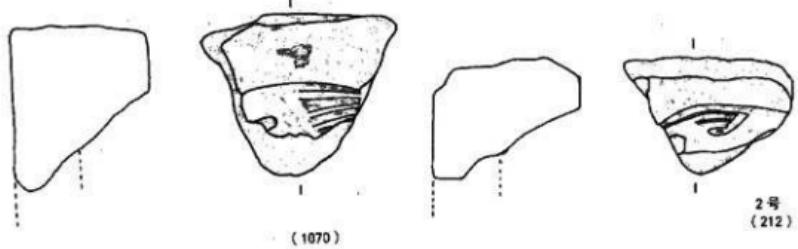
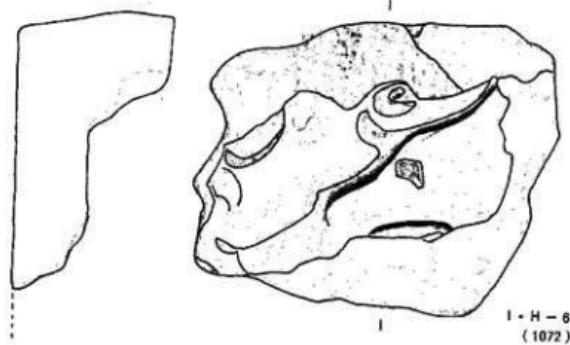
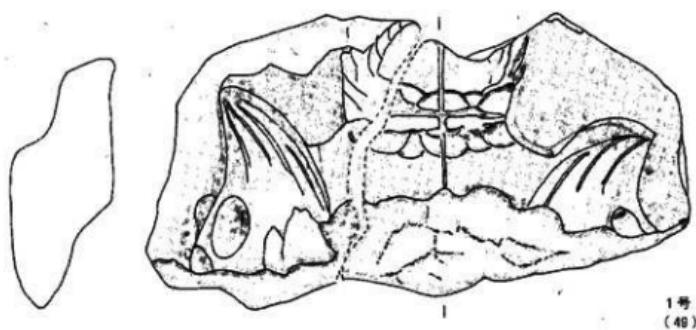
出土した古銭は、皇宋通宝（1039年、宋）、永楽通宝（1411年、明）の2点である。

(7) 陶器

調査地区の全体より総数70余点出土した。

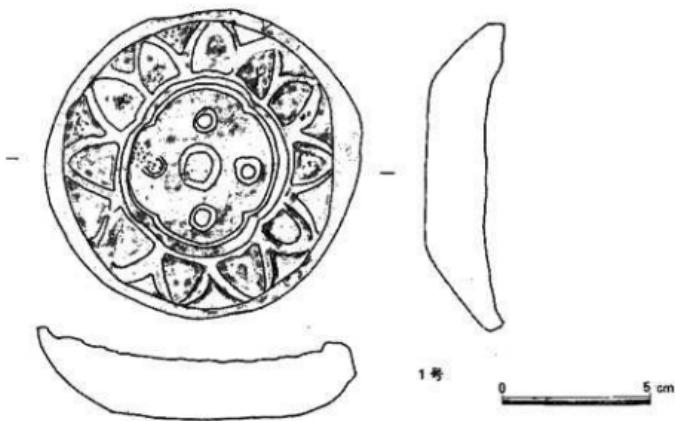
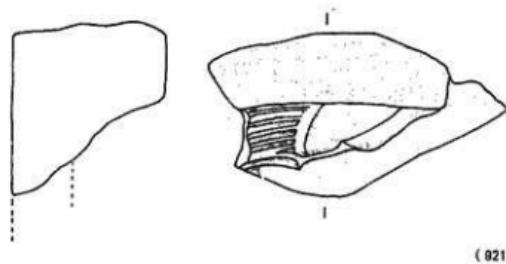
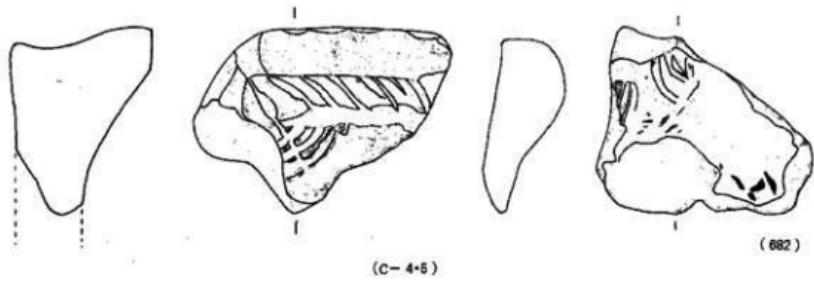
その主だった陶器について紹介すると、平安末の灰釉皿（猿投産）1個、鎌倉時代では、おろし皿、カメ（瀬戸産），そのほか中国産の青磁破片など7点。南北朝時代では、おろし皿、灰釉仏花器、カメ（瀬戸、常滑産）16片が出土した。室町時代では、天目茶碗、香炉、すり鉢、平茶碗（瀬戸産）、皿、天目茶碗（美濃産）等35片が出土。桃山時代の陶器は、こしき炉台の北側地場下より天目茶碗（瀬戸産）破片1個のみである。江戸時代の陶磁器は、グリットからの出土と表面採集のものである。

これら陶器の時代別出土量をみると、平安、鎌倉時代のものは少なく、南北朝時代になると数がやや多くなり、室町時代が最も多い。桃山時代以降は減少している。このような結果から南北朝、室町両時代は梵鐘鋳造に深い関係をもつてゐることがうかがわれる。

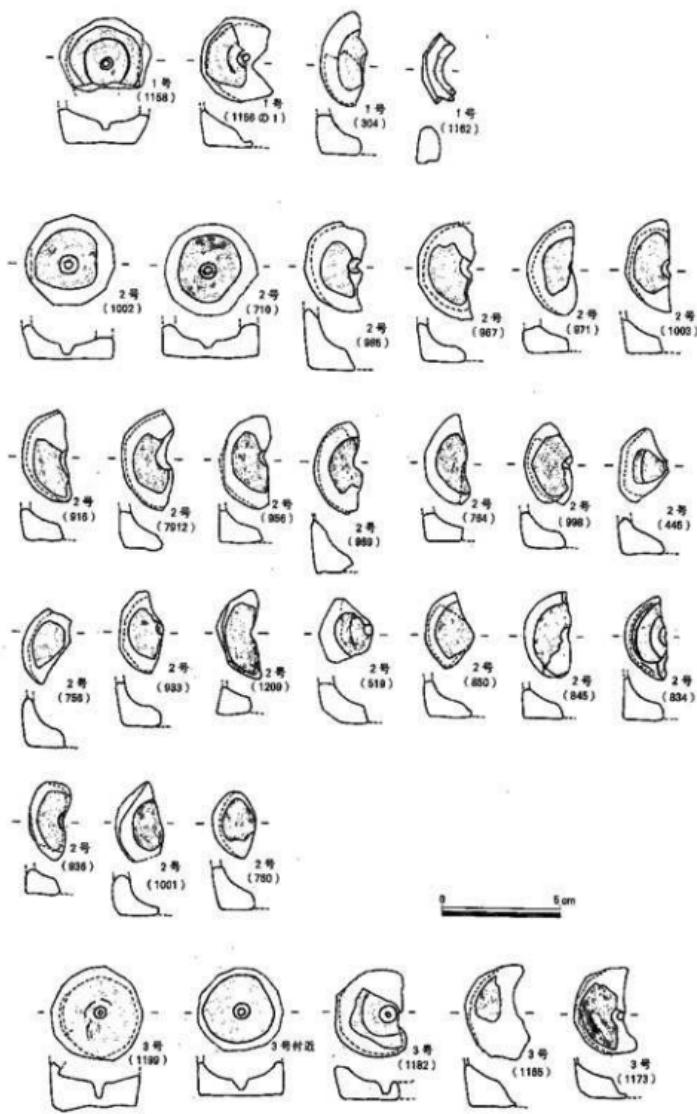


0 5 cm

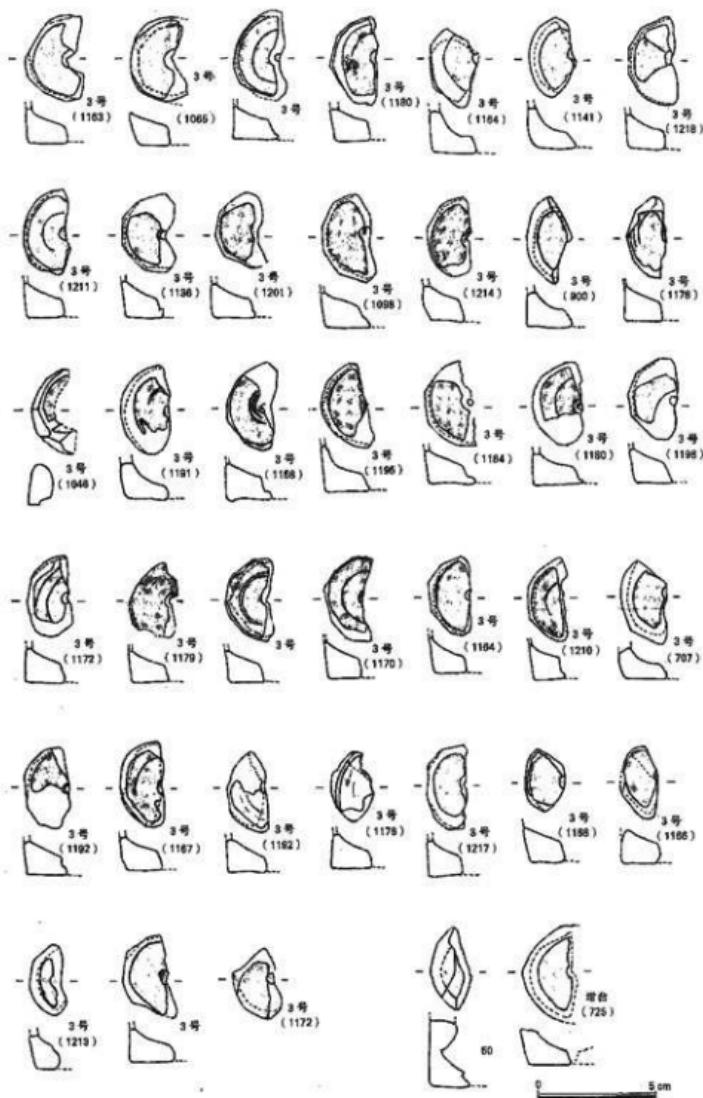
第5図 電頭鱗型実測図 (1 : 2)



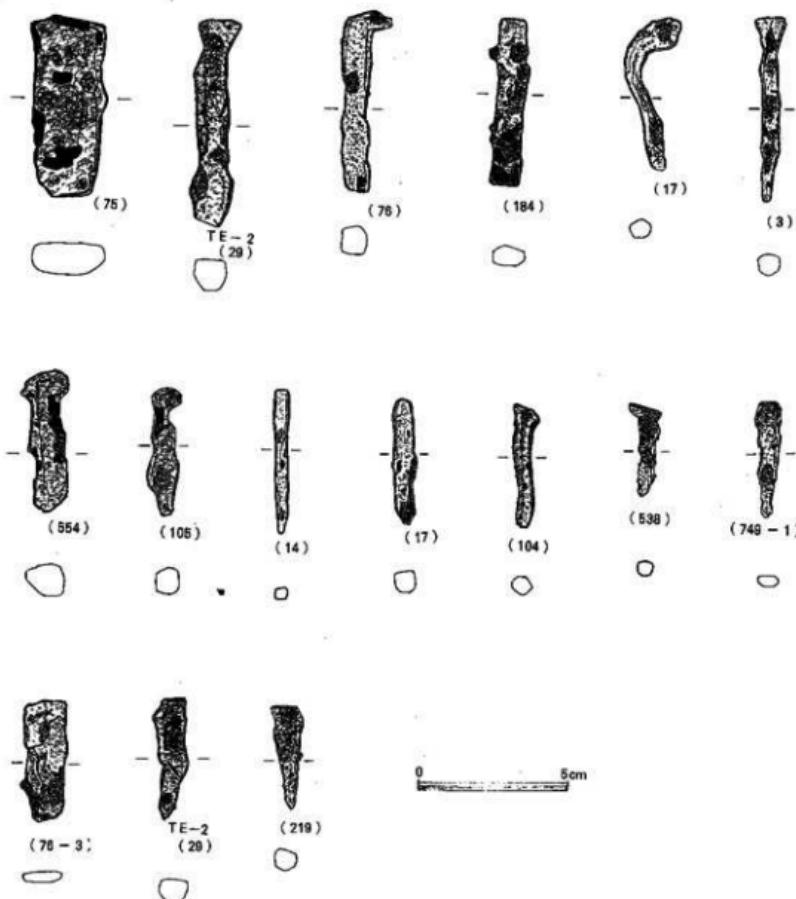
第6図 電頭・撞座飾型実測図 (1:2)



第7図 乳鉄型実測図 (1 : 2)



第8図 乳鉢型実測図 (1 : 2)



第9図 鉄製品実測図

第IV章 まとめ

寺平遺跡の発掘調査と保存について

寺平遺跡は、旧西岸寺の境内にある。西岸寺の古い参道は現在の参道より南側にあったのではないかというところから、西岸寺前の水田に、南北にトレンチを設定し調査したところ、粘土の焼けた、鋳型ではないかと思われるものが多く発見された。

長野県教育委員会文化課の指導で、梵鐘研究の権威である坪井良平氏の鑑定をうけたところ、梵鐘の鋳型であることが確認されたのである。しかも、この鋳型は南北朝時代のものと考えられ、現在南北朝時代の鋳造址が発見されていない現状から、梵鐘研究史上きわめて貴重な資料であり、発掘調査を行ない詳細な記録をとることになったのである。この調査で得た二、三の問題点について記しまとめしたい。

1. 梵鐘鋳造の場所と西岸寺との関係について、発掘の指導にあられた坪井氏は、西岸寺の伽藍に近すぎる位置にあるので、西岸寺の梵鐘鋳造と考えるのには、火を相当使用するので、やや問題があるなどの意見も述べられた。

2. 梵鐘の鋳造にあられた職人は、時代的な面から大和の大工ではないかと、坪井氏は指摘された。南北朝時代の梵鐘は全国で113口が知られている。信濃では、下諏訪町慈雲寺（応安元年戊申六月初三仏殿立柱日、大旦那、大祝豊久。大工、葛城知盛）、葛城知盛は人和國葛下郡下田の鋳物師である。鐘の大きさは口径66.1cm、高さ113.8cmを測る。寺平発見の梵鐘より小さいものである。14世紀時代の信濃の梵鐘は4口でいずれも大和の鋳物師の作と言われている。

3. 分布調査により発見された焼けた土塊は、第1号遺構の梵鐘鋳型底部発見までは不明の土塊として処理されてきたのであるが、第1号遺構の梵鐘底部と類似のものであることが明らかとなり、第3号遺構の出土を合わせて鋳造鋳型底部が3個出土したこととなった。このような事実から、寺平遺跡梵鐘鋳造の時間差のあったことも考えられる。

4. 第1号遺構の梵鐘鋳造鋳型底部は、一部破損していたが、ほぼ完全に近い形で発見されたことにより、現在南北朝時代の鋳造址が本遺跡のみであり、遺跡の現場が現在の地表面より盛土になる設計などから、後日の研究資料として、埋没させ保存することができる、鋳型底部は全部砂を埋め保存処置をとった。

5. 第2号遺構は、第1号遺構の様な鋳型底部をもつ遺構ではなく、三本の溝が東西に設けられた形の遺構である。この溝の例は大津市滋賀里町長尾鋳造遺跡にその類似がみられるが、底部の存否が問題である。

6. こしき炉台（仮称）の構造は、頭大～拳大の平盤状の自然石と、梵鐘鋳形の硬質部の破片32個を粘質の強い粘土で固めて作った台で、相当の重量を支えるに足る台と思われる。上部は水田の地場下にあたり、水田造成時に破壊されたと思われる。

7. 第3号遺構、本遺構については、鋳型の分布状態及び鋳型底部の状況について、詳細に記録を行なった。鋳型底部は、径90cmである。第1号遺構出土の鋳型底部は径が88cm、第3号遺構は90cm、第1号遺構上層部（分布調査により検出）鋳型の底径は70～75cmと推定される。現在のところ本遺跡発見の鋳型は3種類の梵鐘の鋳型があったことが明らかとなった。

8. その他の遺物

- 1 竜頭の鋳型は、第1・2・3号遺構の他、グリッドから出土したが、第1・2号の竜頭は別個体のものであることは明らかであるが、その他は小破片で識別は困難である。
- 2 撒座鋳型、今回の調査では撒座は第1号遺構発見の1個のみにとどまったが、梵鐘鋳造の年代

決定の有力な資料となつた。

- c. 乳型、本遺跡から発見された乳型は本文中に分類したとおりである。
- d. 木炭分布状態からみて、相当広範囲にわたっているので、梵鐘鑄造には意外に広い場所が必要であったと思われる。今回の調査では約 100 m² 余の調査面積に終わってしまったが、周辺の分布調査で、遺物が出土するので、広範囲の調査が必要と思われる。
- 9. 本遺跡調査に当たり、文化庁、坪井良平氏、奈良国立文化財研究所、長野県教育委員会文化課をはじめ、多くの方より御教示、御協力を賜わったことに対し、心より深く感謝申し上げる次第である。

(調査団長 友野友一)



P 2 遺跡航空写真



P 3 第1号遺構と梵鐘鋳型底部



P 4 第2号遺構



P 5 第3号遺構と梵鐘鋳型底部



P 6 こしき炉台



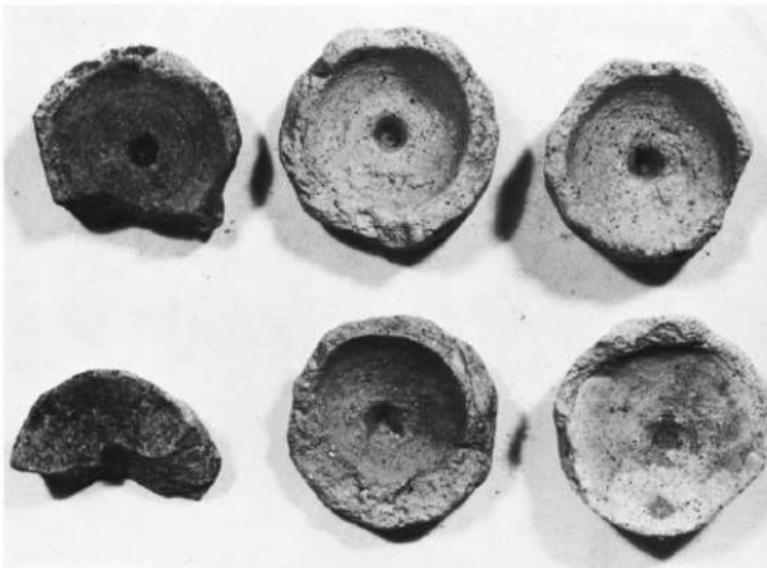
P 7 龙头铸型片



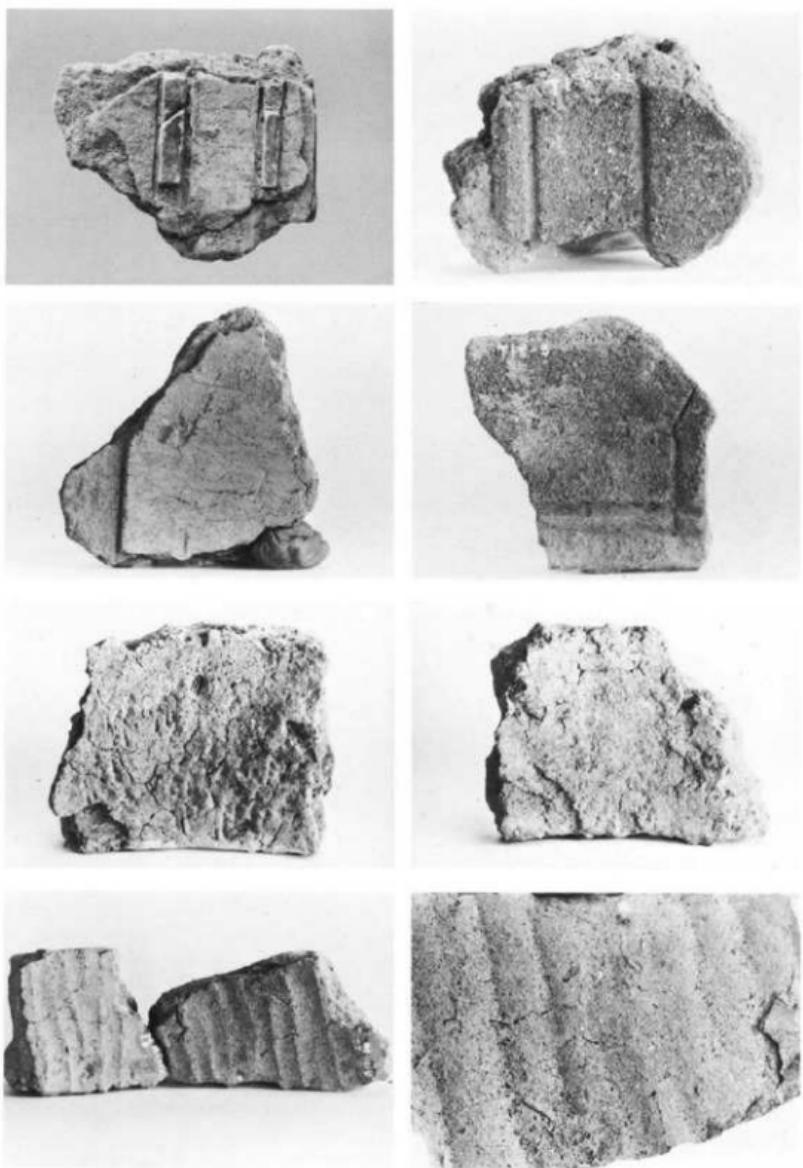
P 8 座铸型



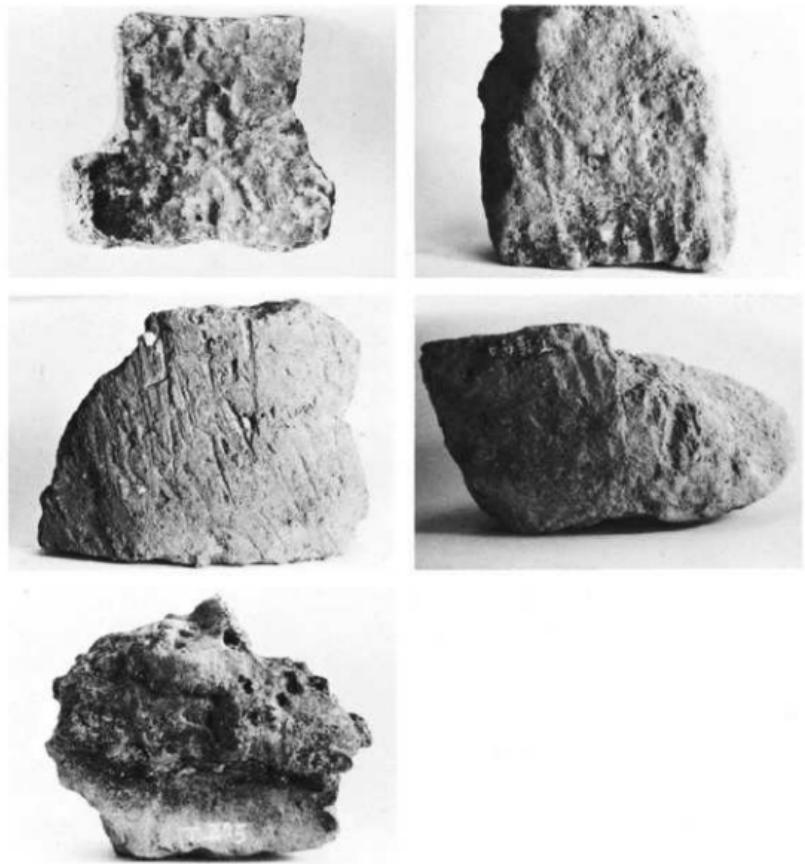
P 9 乳鳞型片



P 10 乳鳞型片



P 11 梵鐘範型



P 12 范鍛鑄型，鐵滓



P 13 銅渣



P 14 鐵製品

飯島町遺跡調査会組織

会長 熊崎安二（教育長）
 理事 片桐修（飯島町文化財調査委員）
 宮下静男（　　“　　）
 北原健三（　　“　　）
 桃沢匡行（　　“　　）
 松崎研定（　　“　　）
 中島淑雄（　　“　　）
 片桐佳彦（　　“　　）
 小林嘉男（　　“　　）

 監事 堀越清志（飯島町監査委員）
 中野武司（　　“　　）

 幹事 吉沢内次（飯島町教育委員会教育次長）
 米沢長実（　　“　　係長）
 伊藤修（　　“　　主事）
 宮下淑江（　　“　　主事）

 [発掘調査団]
 団長 友野良一（日本考古学協会員）
 調査員 伊藤修（飯島町教育委員会主事）
 調査補助員 和田武夫（長野県考古学会員）
 中村正純（飯島町）

寺平遺跡
 -緊急発掘調査報告-

昭和55年3月20日 印刷
 昭和55年3月25日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町
 印刷所 藤原印刷株式会社
 松本市新橋7-21
 ☎0263(33)5092㈹



寺平遺跡付近地形図